

農委大会講演要旨

コメ生産・流通の現状と課題

東京大学大学院 特任教授 鈴木 宣弘 氏

現代日本の食と農を巡る情勢は不安定さを増しており、令和の米騒動も依然として収束する兆しが見えない。その背景を紐解くと、戦後にアメリカからの輸入農産物が急増して国産麦・大豆などが打撃を受けた歴史的



鈴木宣弘氏

経緯に加え、米の消費量減少に伴って減反政策を実施するなど、長期的な自給力低下を招いたことが、近年の猛暑や需要増加と重なって米不足に直結した。

農水予算は防衛費拡大の影響で長年にわたり抑制され、資材の高騰や国際情勢の悪化なども押し寄せている。特に輸入依存の肥料は値上がりが続き、飼料価格の高騰で酪農経営も厳しい。野菜の種子も9割を海外に依存しており、地域で種を守る取り組みの強化は欠かせない。

貿易自由化で安価な農産物を受け入れてきた政策の責任は大きい。リスクを伴う「安さ」を選び、地域の農産物を支える消費行動を十分に取らなかった点は国民側の問題でもある。

食料備蓄も消費量のわずかに1.5カ月分に留まり、「輸入が止まったときに子どもたちの命をどれほど守れるのか」という課題が突き付けられている。

また、「日本は農業に過保護補助金漬け」という誤った認識に基づく意見が散見されるが、欧米諸国では命・国土・環境・地域のコミュニティを守る農業は、国を挙げて支えるべき産業との認識が常識となっている。

昨年には米価が上昇したが、30年前の水準に戻ったに過ぎず、コスト高の現状では採算が合わない。生産者が求める価格と消費者が支払える価格の差を埋める仕組み作りが必要だ。

有事の際に命を守る要は食料と、それを生み出す農業である。消費者が農業や食料自給率の問題を、自分たちの命の問題でもあると認識することが肝要だ。生産者と消費者が相互に安全で美味しい地域の農産物で繋がり、支え合って都市農業・農地を守ることで、国内資源を活用した高品質な食料供給が実現する。輸入依存からの脱却を図る上では、やがて生産者・消費者と

いう区別をなくし、住民として地域全体で分担して遊休農地を耕し、家庭農園や市民農園を拡大する「飢えるか、植えるか」運動も考えられる。

大阪では、中小規模の農家と農業委員会系統組織が連携して都市農地の保全に努め、地域の食を支える中心を担っている。都市部では大型商業施設の新設など大規模な転用案件もあるが、大阪農業を守る「最後の砦」として食い止めていきたい。大阪農業の活性化は食料危機に耐えられる日本を創る鍵となる。今一度、農業委員会の委員の皆さんの活躍に期待している。

(林佑)

都市農地賃借円滑化法事例①

自分の感動した味を届けたい

富田林市・得丸 一規さん

今年2月に就農した得丸一規さん(47)は、都市農地の賃借の円滑化に関する法律により、高齢の所有者が耕作困難となっていた富田林市喜志の生産緑地を3月に約30㍓借り受けた。就農当初太子町で借り受けた約40㍓の農地に続いて規模拡大するもので、同市において、円滑化法に基づく初めての貸借事例だ。

当初、就農先の候補として富

田林市に相談をしていたことがあり、その経過から市より現在の生産緑地の紹介を受けた。住宅地に近接しながらも、区画の形状や水利など営農条件が良く、借り受けを決めた。

就農当初から行政や地域農家など周囲の人々との関係性を築くことの重要性を実感したという。借り受けた農地でしっかりと営農を続けることが地域での

信頼につながるという信条のもと、日々農作業に励んでいる。

近隣では、同様に生産緑地での耕作に苦慮する高齢の所有者も多く、着実に信頼を積み重ねることで、今後の規模拡大にもつなげたい意向を持っている。

現在、ブロッコリー、ナス、トウモロコシなど多品目の季節野菜を栽培。小売店勤務時に生鮮野菜を担当しながら培った売れ筋を読む感覚を活かし、消費者ニーズを踏まえた柔軟な作付けを図る狙いがあるようだ。

農業を志した原点は、穫れた

てのトウモロコシの甘さに感動した経験にある。現在、生産した野菜は、道の駅近つ飛鳥の里・太子や、あすかてくるでなどの地元直売所に出荷。特に朝穫れのトウモロコシは好評で、追加の出荷依頼が入ることもある。

得丸さんは、「経営の安定が第一目標。軌道に乗れば規模拡大も考え、自分が感動したトウモロコシの味をより多くの人に届けた」と話す。

(沼田)



「手探りの1年目は苦労も多いが、念願の農業を楽しめている」と得丸さん